高校１年

「いのちネットワーク」――生命と環境を考える

槙　本　直　子・米　田　閏　一・長谷川　　弘
滝　口　恵　子・平　松　良　行
大　口　悦　子・飯　島　幸　久

１．学年テーマについて

総合人間科では「現代の高校生は何を通して人間と社会を理解していくのか」「高校で何を学ぶべきなのか」を根本的に問い直すことを課題としている。また、既存の教科の枠組みだけでは対応できない複合的な現代社会の問題を解決する力を育てるために、学力とは何かをあらためて問いかける教科でもある。従来の学習によって得られた新しい知識や技術の集積といった結果重視から、「自己学習力（問題発見・問題解決）」や「自己表現力」をふくむ過程重視へという最近の傾向の中で、学習方法を模索しながら試行錯誤の実践段階である。

こうした新しい学力観のもとに本校の生徒たちの現在の状況をながめると

①社会と自然との関わりが希薄で、興味・関心が乏しく問題意識に欠けるもの。体験不足からいわゆる教科書的意識だけで理解したつもりになっているもの。

②創造力・想像力の不足から、新しい状況・環境に対して適応し課題を解決していく精神作用に欠けるもの。

③偏差値に代表される一定の価値観にとらわれ、常に他者と比較して自分の能力を固定化されたものと考え、自信と意欲を失っているもの。

④学習の目的がつかめず、将来への目標・夢を持ち得ないもの。

といったいくつかの問題点があげられる。

こうした生徒にも学ぶことの楽しさを実感させ、自分自身の人生を自覚的に選択していく力を育てることを総合人間科ではめざしている。

高校１年では、高校３年間の導入として、自己の存在意義を社会の中で実感させ、学ぶ楽しさを経験させることを念頭においた。

学校全体での学年テーマの検討により、高校１年では「生命と環境」を扱うこととなっている。このテーマのもとに生徒１人１人に野外学習を中心とした個人研究を展開させ、地域社会とのつながり、人とのつながりを形成させながら、その中で自分の存在を考えることをめざして、学年テーマを「いのちのネットワーク　ー生命と環境を考える」とした。

「いのちのネットワーク」とは、私たちがタテの（親から子、歴史など時間的）つながり、ヨコの（地域、国、地球の自然環境や社会環境など空間的）つながりといった無数のいのちの連関つまりネットワークの中で生きていることを学び、みんなで支えあって生きていると体で実感することをイメージして名付けた。

また、個人研究とすることで、生命と環境を物理・化学・生物といった自然科学や、法律・経済・政治・国際関係といった社会科学、文学・心理学・歴史・教育・福祉といった人文科学、さらに芸術や保健・家庭などさまざまな視点からのアプローチが可能となり、より多くの学問分野を結び付けたり、学ぶ過程での情報や人間の幅広いネットワークを築こうという意図も込めた。

「生命と環境」を幅広くとらえ、生徒一人一人の興味関心を大切にはぐくみ一つのテーマを深めていくとともに、その成果を集団に投げかけることにより、高校１年120人の120通りのアプローチからなる豊かな生命観が築かれることを期待している。

２．学習方法と指導体制について

総合人間科の入門的段階である高校１年（１クラス40人・３クラス）では、まず第一に学び方を学び「自己学習力」を育てるために、自らの興味や関心を発掘し一人一人が自分に課す問題を提起することをめざした。

学習方法としては、個人研究を中心とし画一的で受動的な授業形態を極力避け、学年担任団７人の集団指導をめざして指導教官制（クラスは解体）を導入した。

各生徒に生命と環境という学年テーマにそって自由な発想で個人研究テーマを設定させ、自然や社会、人

に学ぶフィールドワークを前提とした研究方法を検討させた。テーマの傾向ごとに20人以下の７グループとし、指導教官のもとにグループ内でのディスカッションや情報交換、共同研究もおりまぜながら展開した。（指導教官は担当教科や興味を考慮し、学年団で相談し決定。）

本校では15年以上にわたって高校１年で野外学習が実施されており、学年全員同一コース・45人程度３コース・小人数グループ別とさまざまな形態での実践を重ねている。また、附属中学卒業研究・研究旅行集録作成などの経験も持ち、それらをより発展させた形態でのフィールドワークにより総合学習が可能であると考える。

１学期には、人やものの研究環境づくり、自己分析（興味・関心の発掘から研究テーマの決定）、研究方法の模索を目標とした。夏休み中の予備調査を経て、２学期にはフィールドワークの計画・実施・報告を行い、３学期に研究のまとめとして個人論文集の作成を行った。

また、既存教科の指導の中でも総合人間科と呼応し、生命と環境に関わる内容を心がけた。

英語科では、夏休みの課題として“NATURE· THE WONDERFUL”（文英堂）を読ませて、「生命」に関する考察の一助とし、冬休みの課題として“THE STORY OF CHIUNE SUGIURA－6000人の命のビザ”（三友社）により人権や命の大切さについて学ぶ糸口を与えた。生物では「生殖革命」「遺伝子操作」「エイズ」「臓器移植」「脳死」「地球環境問題」等のテーマを自然科学的な側面からだけでなく、社会問題としても扱い、意識調査なども実施した。

学年担任団の集団指導を実施するに当たっては、互いの意志疎通を十分に図ることが求められる。毎週の学年会では総合人間科の授業内容、生徒の作業を検討し、同じ報告書用紙を用いてその時間の到達目標を確認していった。全体指導の時だけでなく指導教官別のグループ指導の際にも、毎回展開についての打ち合わせを実施し、教官の同一歩調をめざした。各自の指導生だけでなく生徒集団全体を全体でみることが前提であり、学年会では問題生徒を報告し指導方法を討議、研究方法についても情報交換を行った。教科指導と異なり、自分の専門領域を越えた総合的な内容となるため教官間での学習も欠かせない。

指導教官制では１グループ20人以下となり、少人数を対象としたきめ細かい指導も可能である。研究は生徒の自主的活動を求めるものであるが、特に最初は指針を与え、建設的な方向へ導き、一人一人への助言など指導教官の役割は大きい。また学年団が指導方法などの事前の意志統一を図らなければ生徒からの不信感につながる。いかに十分な討議のための学年会の時間を確保するかが課題である。

３．指導の経過

(1)　一学期の実践

「いのちのネットワーク」のネットワークつくり

一年間の個人研究実施に先立って、学びあう集団つくり、まじめに語り合える仲間つくりや考える習慣つくりの中から、自分自身を見つめ個人研究テーマを模索させた。人から与えられるのではなく自らがやる気を出せるテーマをじっくり探るために、書くこと、聞くこと、討論することに時間をかけた。

また、とくに総合人間科の意義をしっかりと認識させるために、５月30日～６月１日に行われた林間学校を第１回フィールドワークとして位置づけ、クラス討論や総合人間科の特別授業を盛り込んだ。

〈第１回〉４月15日

①総合人間科で学ぶこと
（全体オリエンテーション）

②附属中学卒業論文報告会（生徒代表７人）
テーマ設定の動機、作成過程（苦労した点など）、書き終わったときの感想

〈第２回〉５月６日

林間学校における総合人間科にむけて準備
グループ分け・研究係の選出
クラス討論のテーマ検討
↓
クラス討論のための事前アンケートの作成・実施・集計

〈第３回〉５月20日

自己PR集の作成
興味・関心のある社会問題、理想とする生き方など
「自分を探り、自分を語る」→仲間への影響、仲間からの刺激

５月30日～６月１日　林間学校

〈林間学校での取り組み〉

①クラス討論
A組・B組「宗教とは何か」
C組　　「何のために勉強するのか」

②総合人間科特別講義
学年担任団からの問題提起　15分×６人
個人研究テーマ決定の参考に
・心理学
・いのちを見つめる優しい眼差し
－ボランティア活動－
・地球サミットからみる地球環境問題

林間学校での討論の様子

- トイレからの発想
- 薬害エイズ
- 日本人の意識構造（差別・えん罪）
- 食
- 都市環境問題（車とゴミ）

〈第４回〉６月３日
個人研究テーマの検討→クラスでの発表
（テーマ・動機・研究方法・
フィールドワーク候補地など）
研究テーマ調査提出

〈第５回〉６月17日
個人研究テーマ別指導教官決定
↓
グループ別討議（７グループ）
テーマと研究方法の再検討（より具体的に）

〈第６回〉７月１日
指導教官別
個人研究テーマディスカッション
夏休み個人研究実施計画書作成
参考図書のリストアップ、
フィールドワーク実施計画

〈第７回〉７月15日
教育学部特別講義（教育学部大講義室）
森林保護とエコロジー
額田郡森林組合　　木見尻　哲史　氏
フィールドワークの意義と方法
社会教育講座　　新海　英行　教授

一学期は個人研究にむけての準備段階であった。自分の興味にあわせて研究テーマを設定するまでを丁寧に段階を追って指導していくために一学期間を費やしたといってもよいが、それでも時間的に十分であったとはいえない。なんとか全員が研究テーマを決定したところで夏休みとなった。（しかし、その後二度三度と研究テーマを変更する者も出てくる。）

夏休み中に個人テーマに関する基本的知識を身につけるための文献調査や予備調査のためのフィールドワークを実施するよう指導し、計画書を作成させた。

(2) 二学期の実践
―「脱教室」―フィールドワークにむけて

夏休み中の実践においては、（予想されていたことではあるが）進行状況の生徒による個人差が大きい。なかには自分の興味・関心がはっきりしており、趣味を自分のテーマと結びつけて楽しんで活動した者の例もあるが、具体的な行動を始めるには、提起された問題についての基本的な知識が必要でありその不足を痛切に感じた段階ともいえるであろう。

二学期は学校行事として設定されている11月の野外学習の具体的な準備・実施が活動の中心となった。研究が進んでいる仲間からの報告を周囲への刺激とし、遅れがちな生徒の活性化を図った。「学びあう集団」での、「脱教室－人と社会から学ぶフィールドワーク・野外学習－」が高校１年の総合人間科の中心であり、いかに目的意識を持って内容の濃いものにしていくかが大きなポイントとなる。自然や社会とのつながりを念頭におき、文献からだけでなく人から学ぶ姿勢を重視し持続的な活動をめざした。

〈第８回〉９月16日
指導教官別夏休み活動報告会
（夏休み活動報告書・読書記録・フィールドワーク実施状況の提出）

〈第９回〉９月30日
野外学習実施計画①
メンバーの検討・訪問先の候補選定（訪問予定先への電話での事前交渉→内諾を得る）

〈第10回〉10月７日
野外学習実施計画②
野外学習グループ編成
（役割分担　時間等の調整）
実施計画書作成・提出→12日締切

〈第11回〉10月21日
野外学習実施計画③
訪問依頼書・質問状作成

〈第12回〉10月26日
野外学習実施計画報告会（指導教官別）

11月２日　中等教育研究協議会
個人研究中間発表会（代表者）
（テーマとねらい・研究経過・野外学習計画）

11月16日　野外学習
〈第13回〉11月18日
　野外学習事後指導
　　訪問先への礼状書き・実施報告書作成

中間発表会の様子

〈第14回〉12月７日
　野外学習実施報告会（指導教官別）
　　生徒間の相互評価
〈第15回〉12月16日
　個人研究のまとめにむけて
　　研究論文の構想→冬休みの計画
　　（最終的な基礎知識の収得）

(3)　三学期の実践

個人研究のまとめ－研究論文と研究発表

一年間の活動のまとめとして論文作成と研究発表に取り組んだ。テーマ決定から情報収集、フィールドワークを通じて学んだことをきちんと自己消化して周囲の仲間に発信する方法を身につけさせることを目ざした。

「自己学習力」を育てることを目的に個人研究を実施してきたが、最後に一人一人の研究成果を集団に投げかけることで生命と環境についての様々な考え方や生き方を知り、初めて学年テーマである「いのちのネットワーク」は完了する。また、個人学習から集団学習へと次年度につなげる一つのステップとする。

〈第16回〉１月20日
　個人研究論文作成①　論文の書き方指導
〈第17回〉２月３日
　個人研究論文作成②
　　指導教官からのアドバイス

個人研究論文提出　２月13日

〈第18回〉２月17日
　個人研究論文最終チェック（指導教官）
　グループ内での生徒間相互評価
〈第19回〉３月16日
　研究発表会（各グループ代表者）
　最終自己評価
３月19日
個人研究論文集「いのちのネットワーク」発行

４．生徒の取り組み状況と変容

(1)　研究テーマについて

a）テーマの傾向について

「生命と環境」を幅広くとらえ、自分の興味・関心を重視するよう指導したため、研究テーマは医学・福祉・生物・心理学・歴史・法律・芸術（映画・音楽）…と多岐にわたる。７つの指導教官グループはテーマの傾向別に編成した。

①長谷川（国語科）グループ
　心理学（子どもの心理、犯罪心理、恋愛・結婚、ストレス）文学・歴史
②槙本（生物科）グループ
　地球環境問題（自然環境破壊、南北問題、宇宙）福祉（障害者問題、ボランティア）
③滝口（美術科）グループ
　日本人の意識　差別問題
　脳と心（臓器移植、生と死）映画
④大口（数学科）グループ
　病気と薬（エイズ、ウィルス、癌）
　家族（老人、子ども）
⑤平松（英語科）グループ
　都市環境問題（車、ゴミ、原子力発電）
　法律問題　危機管理　国際比較
⑥米田（音楽科）グループ
　食生活（米、水、食品添加物、成人病）
　音楽　動物
⑦飯島（体育科）グループ
　体と健康（タバコ、体の構造、スポーツ）
　学歴社会

b）テーマ設定について

〈テーマ設定がうまくいった例〉

例１）以前からの興味・関心をテーマに「人と内燃機関」（車やエンジンに興味を持つ生徒）
　ヨーロッパ車の解体業者、トヨタの環境への配慮をPRした展示会、ホンダの工場見学や聞き取り調査などに積極的にフィールドワーク実施
　↓
　排気ガス規制の法律や海外での環境対策へと研究の広がり

例2）興味・関心を現在の社会問題に結びつけたテーマ
「森ードライアードの営み」
（森と人とのつながりに関心を持つ生徒）
最初の研究対象を愛知万博の候補地の海上の森に→具体的な問題から研究の視点が定まり自然観察会に参加することで人のつながりが生まれる

例3）夏休みにフィールドワークの機会
「障害者と共に」
ボランティア活動に参加したいと思っていた生徒が学校に募集要項がきた全国障害者大会のボランティアや千種区ボランティアスクールに参加（学年で11人）
↓
体験からさらに活動意欲が生まれる（継続性）

〈テーマ設定がうまくいかなかった例〉

例1）安易に話題になっていた現象をテーマに
「エボラ出血熱」「ホットゾーン」
新聞報道などが減るに従って関心が薄れる

例2）自分の興味・関心が見いだせないまま、じっくり考えずテーマを提出
（面倒　何のためにやるのかわからない…といった発言）→テーマの変更を繰り返す
「Mr. レディー」→「ミイラ」→
「盲導犬」→「時計」

例3）同じようなテーマの仲間がいないため不安におちいる→友人と同じテーマに変更
「ゴミ」→「癌」,
「原子力発電」→「力」

c）テーマと他教科の関係

〈教科の学習への意欲につながる例〉

例1）「日本人と外国人の意識や考え方」
「日本と外国の環境と教育」
夏休みのホームステイを利用してアンケート調査→英語力の不足を感じる

例2）「ぼくの16才ー自立ー」
国語の教材（羽仁進「青の時代ー個性について」）が出発点
読書、映画、フィールドワークと発展し、人とのであいに恵まれる

例3）「癌ー癌遺伝子とは」
「人の生活と生命工学の未来」
なかなかテーマが具体的にならなかった生徒が生物の授業でDNAを学習して決定

〈基礎的知識の学習がまだ行われていないため設定があいまいな例〉
「生と死ー脳死より」「解明されない私達の脳」
「移植ー贈られた命」「エイズ」「ウィルス」

生物の免疫機構や脳の学習は11月から。既存学科の学習だけではとらえることのできない問題が多いことを実感するとともに教科学習の総合化の必要性にも気づく生徒が多い。

(2) 研究方法について
（フィールドワークへの足がかり）

本校附属中学出身者は、中学卒業論文の経験があるため、個人研究テーマのもと自分の興味関心を追求する楽しさや充実感を知っている。がその反面、本を読んで書けば（書き写せば）、それで終わりであると考える者もかなり存在した。高校からの入学者は最初ためらいも大きく、書くことの多さ（憲法講演会や演劇鑑賞の感想文も含め行事のたびに実施）に驚きを感じる。

総合人間科は人や社会から学ぶことをめざし、フィールドワークを重視する、書いた結果の論文だけでなく研究の過程を評価することを生徒達には常に伝え行動を求めた。

文献・書籍からの調査以外にもいくつかの方法が試みられた。

①アンケート調査
1人が実施し始めると連鎖的に広がっていった
例；脳死を考えている生徒がクラスメイト、保護者、医療関係者に実施
↓
忙しい医師や看護婦の方からのぎっしりと書き込まれた用紙が送られ感動、研究の意欲に

良い点
- アンケート作成や回収、分析などの作業の楽しさを体験
- いろいろな人の考えがわかり研究の意欲が高まる

問題点
- 調査方法の勉強不足
  アンケート項目や回答の選択枝などがよく考えられていない記述式のため回答の困難さを指摘されたり、集計に苦労する
  →調査の仕方の勉強が必要なことを知る
- 「性」や「自殺」などをテーマにした生徒のアンケート内容
- 調査場所　街角アンケートなどをどう指導するか

②インターネットの利用

例；パソコンサークルの生徒が東海テレビや中日新聞に質問

③手紙などでの資料請求

東京などフィールドワークの実施が難しいところへ

例；シンガポール大使館の大使に手紙、老人医療先進県の役所に

実際にこうした活動を始めた生徒は、フィールドワークへの取り組みに熱心であり、「本を読んで書けばよい」という発言はなくなった。

(3)　フィールドワークへの取り組み

夏休みなどに事前調査として数回のフィールドワークを実施した生徒もいるが、全員に直接体験をさせるため学校行事として11月16日に「野外学習」が設定されている。これまでなかなか研究計画に具体性が持てなかった生徒もこの野外学習の準備にはいると、研究テーマの妥当性や追求方法について検討するようになった。訪問先を決めるにあたっては生徒自身が自分で電話で訪問の可能性を問い合わせ内諾を得た後に、学校からの正式な依頼書を発送した。これまでの本校の野外学習はグループ活動で、訪問先についてはおもに教員側で設定する形態であった。しかし今年度は一年間の個人研究の一貫として実施するので、一人一人のテーマにそって指導教官の助言のもとに自分で訪問先を検討し、当日の個人行動も可とした。結果的にこの日一日に生徒たちが訪問した先はのべ96ヵ所にのぼった。

また、学校行事としての野外学習だけでなく日常的なフィールドワークも積極的に勧めているが、この行事を経験して意欲が高まり、この後何回かフィールドワークを実施した生徒もいる。

〈意欲的に取り組んでいる例〉

- 自分が本当に学びたいテーマを持っているもの
- 前もって１、２度フィールドワークを実施したもの→前回の実施で目的意識が高まり、次の訪問予定地の案が出てくる

例；千種区ボランティアスクールの参加者

（前回は20才以上の人の施設だったので同世代の人と→養護学校へ訪問依頼、もう一度同じ体験がしたい）

- アンケートの実施など予備調査をしたもの
- 訪問先を決定していく過程で研究計画方法が具体的になったもの

自分の研究テーマにあった訪問先が見つかり、こころよく受け入れられた

無理であろうと思っていた訪問先が受け入れてくれた

いろいろ断られた後やっと行き先が決まった担当者との話で自分の知識不足を痛感し当日までに調べることが生じた

- 周囲の人達の活動に刺激を受けた

〈困難を感じている例〉

- フィールドワークの難しいテーマの生徒

「人の幸せについて」「自殺者の心理」「性」など→教育学部の教育心理学教室の協力

- 対人関係から

似たテーマであってもよく知らないメンバーとは行きにくい

一人で行くのは不安なので頼りになる友人についていく→自分のテーマに変更する例も知らない人に出会うことに抵抗がある

- 面倒くさい

本を読めばわかる、何のためにやるのかといった発言（しかも本を読んでいない）

(4)　個人研究論文の作成

３学期にはこの１年間の研究活動のまとめを個人研究論文という形でまとめさせた。当初は論文以外の形

個人研究論文集「いのちのネットワーク」表紙
（生徒作品）

態でのまとめ（ビデオ作成や小説、絵画や音楽などでの表現）も話題になったが、最終的には「個人研究論文集」として全員の研究成果が1冊になるような形をとった。1枚約2000字を4枚または5枚と制限し、書く内容を精選させながら、論文の書き方の指導を行った。研究内容を他者に伝えるには言語表現が基本であり、書くことが苦手な生徒も苦労しながらも論文の構成や図表の利用、漫画やカットなどを利用した読み易さへの工夫など多彩な論文が提出された。

最後の自己評価の際には、自分自身を評価できる点や一番苦労した点という項目でこの個人研究論文をあげる生徒がたいへん多かった。（〈資料1〉の生徒自己評価を参照）全員の言葉が一つの形として残り、充実感が与えられたようである。

「本や資料の引用ではなく、自分の言葉で自分の考えを表現しようとした」と答える生徒が大半を占め、個人研究とした意義が現れた。しかし、十分な時間的余裕を与えて指導したつもりがあったが、計画性に乏しく最後になって時間に追われ内容的に妥協した生徒も多かった。

(5) 「学習の遅れがちな」生徒の状況と変容

〈教科学力が不足し授業への取り組みに問題、
自分の能力に自信が持てないもの〉

既存の教科以外に興味関心を持つ生徒は、活躍の場を与えられ生き生きと率先して取り組む。この意欲を教科学習にどう結びつけるかが課題である。また、何事にも関心が薄く自分の興味関心がどこにあるか引き出せるよう種々の働きかけをしなければならない生徒も存在する。

例1）学歴社会を取り上げ、当初から積極的に発言、いち早くアンケートの実施などの行動に
→持続性の不足、公開授業での発表要旨の作成を重荷に感じる場合も

例2）中学時代から引き続き障害問題を取り上げ意欲的に社会参加（施設への依頼も自ら）
→中学時代には不登校気味であったのが、発表にも積極的でグループのリーダーとして活躍

例3）数学の学習に困難を感しているが、パソコンサークルに所属しこの活動を軸に取り組む
→インターネットなどの他生徒への指導力を発揮、数学の教科担当とも良好な関係

例4）教科だけでなく社会問題にも関心が持てず能動的な活動がみられない

〈教科学力を能力の価値基準とし、教科書的知識で
理解したつもりになっているもの〉

文献調査や論文を書くことにはさほど抵抗はないが、最初フィールドワークに対しては「なぜ必要か」「本を読めばわかる」等の発言が目立った。しかし、このタイプの生徒が実際のフィールドワークを経験した後の変化が大きく、研究の意義や楽しさを理解する。

例1）グループのメンバーに触発されてフィールドワークを実施、その意義を認識
→楽しんで研究をすすめ、意欲的に活動研究論文も充実したものに

例2）総合人間科に懐疑的で前向きに取り組めない
→テーマ設定があいまいなまま、ちょっとした挫折で変更を繰り返す

〈人間関係が希薄で社会や自然への関心が乏しく
問題意識が低いもの〉

対人関係が難しくグループワークよりは個人研究を望む傾向。対外的な交渉などには援助が必要だが、場面を設定すれば自発的な行動も見られた。じっくり時間をかけて見守る必要がある。

例）テーマが決められず、たまたま空いたフィールドワーク先によってテーマも決める
→一人でフィールドワークを実施、事前研究で意欲を見せる場面も

〈地道に努力することを嫌い、
早く結論がでることを望むもの〉

「面倒だ」「誰かやってくれ」といった発言が目立つ。研究論文さえ書けば良かれと途中過程は手を抜くためやらされているという雰囲気が最後まで続く。

例）人と同じテーマにし、自分からは働きかけをしない

〈今まで学んだ知識や経験を生かして
問題発見・解決することに慣れていないもの〉

これまでの学校教育の場ではなかなか育てることのできない部分であり、多くの生徒がこれに該当する。「どこで調べたらよいのか」「問題の焦点をどうしぼったらよいのか」などの声が最初上がったが、教官や仲間との討議や具体的な野外学習準備と実施の過程で徐々に追求の方法を学習。

5．評価について

既存教科と異なり評価方法については定まったものがなく、評価の観点などこれからの検討課題である。初年度である今回は、指導教官のABC3段階評価とコメント評価、自己評価、生徒間の相互評価を試みた。

生徒間の相互評価は、フィールドワーク実施後の報告会と個人研究論文について項目別5段階評価とコメント評価を指導教官グループ内で行い、指導教官が眼を通した後本人に手渡し自己評価の参考にさせた。

できるだけプラス評価を心がけ、研究の意欲がそがれないよう、特に中間段階ではアドバイス的な評価を行った。また、結果だけでなく研究過程の活動状況を把握し重視する姿勢を生徒にははっきり示した。そのために指導教官の評価は点数化するのではなく、一人一人へのコメントとし、途中経過に眼を向けていたことを言葉で表現した。

(1)　自己評価

この教科では他からの評価よりも自己評価－どれだけ努力し充実感を得たか、どのような力が不足していたか、自ら何を学びどのような力がついたか、これからどのような力をつけたら良いのかなど－を試みることに大きな意義がある。受動的な学習や知識の獲得を目的としているのではなく、自己学習力を培うことを試みているからには評価方法もこれを念頭におき、きちんと自己評価できる態度・力を身につけさせたい。

次にあげるのは、今年度最終段階での自己評価票の項目である。①②③④はそれぞれ５段階で、⑤⑥⑦は記述式で自由にかかせた。

〈評価項目〉

①テーマの設定は適切であったか
（研究の動機と目的）
自分の興味関心にしっかりと眼を向けたか
問題意識が育てられたか

②研究計画・方法は適切であったか

③活動過程・状況
a）興味関心をもって取り組めたか
b）継続して活動できたか
c）活動報告や議論がなされたか

④個人研究論文
a）研究の目的が明確に書かれているか
b）論文の構成（章立て）
c）論旨が論理的に展開されているか
d）結論が自分の言葉で述べられているか

⑤自分で評価できる（頑張った）点

⑥研究を進めるに当たって一番困難だったこと

⑦この研究から今後の生活に生かしたいこと

自己評価の結果をみると、一人一人の到達目標の違いが鮮明に現れる。特に５段階評価をさせた部分については主観的評価なので指導教官の評価と食い違う部分も大きい。多くの生徒は、他の生徒を評価する際にはずいぶん配慮し良い点を見い出そうとするが、自己評価に対してはかなり厳しく要求水準の高さを感じた。この自己評価に対して指導教官からのプラス評価が返されることで、自分の研究活動に自信を持ち次なる意欲につながっていく。

記述式で自由な表現で評価させた点については、内容をいくつかの項目に分別して〈資料１〉に生徒の言葉そのままを示した。結果は、新教科総合人間科で意図した「学力」が生徒の間にある程度浸透し、期待に答えるものであったと同時に、いくつか指導困難な問題が浮き彫りにされるものであった。

(2)　保護者から見た子どもの評価

新年度に入ってから、４月に保護者を対象とした総合人間科に対するアンケート調査を行った。（〈資料２〉参照）

既存の教科については、内容が家庭で話題になることは少なくほとんどが成績と進路に関してであろう。総合人間科では、地域社会との関係を通して学んでいくことを主体としているため、多くの場面で家庭からの助言や保護者の仕事先などの協力をいただいて展開された。フィールドワーク先にも、老人ホーム、矯正管区、衛生研究所など保護者からの紹介を得て可能になったところもあった。

アンケートの結果からは、約80％の保護者が総合人間科の意義を認識し、子ども達の社会性の獲得や興味関心の芽生えをこの教科の成果としてとらえていることがうかがえる。保護者の賛同を得ることで、学校と家庭、そして地域社会へと活動の広がりが生じ、より強く生徒に働きかけができるであろう。その一方で、これまでの価値観（偏差値を代表とする学力観や、大学進学を絶対視する学歴重視の考え方など）による学校評価から進路の保障を危惧したり、不安に思う保護者も存在する。この問いに答えるには、生徒達が身につけた力が日常の考え方や行動の変容として表現されていくことが第一であろう。

具体的な保護者の意見を以下に紹介する。

- 親としてはたいへん良い学習をしていると思っているが、本人は「面倒くさい」といっているので少しがっかりです。
- 知識も大切ですが、経験することもとても大切だと思います。
- テーマ別のグループ討論を活発に行い、各自の問題意識が深められ議論しあうごとにお互いの研究がだんだんと発展してきていることを確認しあい、お互いの成長を認めあい喜び合えたら良いと思います。そこが他の教科にない良いところだと思います。
- 日頃命について考えることの少ない生活の中で少しでも生きることについて自分で考え、他の意見を聞くことは何もしない状態よりずいぶん成長できる企画だと期待しています。
- 試みについての意義は十分に理解できますが、与えられたテーマが本人の希望や本当に知りたいこと調

べたいこととずれている場合、それほど一生懸命になっていない様子が伺われた。最後の論文も途中でもう少し丁寧に指導していたたきたい。

- 時間割が土曜の設定になっているので、入学時の資料と違い授業終了時刻が遅くなっていて子ども達の負担が多くなっている。
- 研究のプロセスもテーマ研究を通して指導してほしい。(論文の書き方、プレゼンテーション、ダイアローグ)〈共働・共創・協働・協力〉
- テーマを決めて研究を進めていくと、生半かなものでは自分として許すことができず、自分なりに納得のいくまで努力した。その結果、非常な時間を費やし、教科の学習ができなかった。
- 子ども達が自分で考え意見をまとめることはとてもいいと思います。しかし、テーマが広すぎて最初の段階がもう少し狭い範囲の中で自分で決定する方がより具体的で分かりやすいのではないでしょうか？方針が決まってからはすいぶんやり易そうに思えました。
- 総合人間科こそ時間数を増やすべきたと思います。
- これまで家庭ではあまりなされなかった知的な問題について会話がなされた（特に父親との)。

(3) 指導教官の評価

各個人にはプラス評価を通知票にコメントとして記載した。また、グループ全体には個人研究論文集に文章を寄せ1年間の活動を総括した。以下に7人の指導教官の言葉を紹介してクループ評価に代える。

〈長谷川クループ〉

―心の不思議を旅して―

人間に残された未開の神秘の地、それはひょっとしたら「心」の中かも知れません。いわゆる「第二の誕生」期を迎える高校1年のみんなにとって特にこの「心」の不思議を実感されることでしょう。

さて、この長谷川クループでは主にこの「心」に関心を持つ19人の生徒によって、1年間学んできました。そしてその成果がこの論文となって結実したのです。

またまた未熟な論文ですが、それでもこの論文は、一人一人の生徒にとって自分の「心」を自分なりに見つめ、生まれたはかりの新鮮な果実です。読まれる方はそれそれの仕方で、この果実をもぎ取ってもらえれは、これ幸いに存じます。

〈槙本グループ〉

―人・社会・地球

いのちを見つめる優しい眼差し―

今、地球に誕生した人類社会は一大転機を迎えています。これまでの大量生産大量消費の社会では「簡単・便利・速く・多く」をめざし、私達は物質的に豊かな生活をしてきました。しかし、モノから心に時代に、今私達が求めているのは意識や生活のスタイルの変革、人間関係の見直しではないでしょうか。

槙本グループでは、私達をとりまく“いのちをはぐくむシステム”に優しい眼差しを向けてきました。大気・森・動物といった自然、そして何よりもみんなで支え合っていく人間社会のシステムを弱者の立場で。身近なところから地球・宇宙にまで広がる視点で、私達の心の眼を開いて。

―隣にいるハンディを背負った人々やアジアの仲間と、豊かな森や澄み渡った空のもとで、これからの共生の時代を築いていこう―本当にささやかな私たちの提言に耳を傾けて下さることを嬉しく思います。

〈滝口グループ〉

―私たちを知ること―

人の往来、物の流れ、経済の動きなと、何かにつけて国境を意識しないボーターレスの時代の今『地球』は狭まりつつある。

情報という面から考えても、インターネットの発達により地球上の地域間の距離や時間は急速に狭まりつつあり、このような状況にあっても我々はより相対的な視点を見失ってはならない。それは、あくまでも民族的な物の考え方を等質化するわけではない。いうまでもなく、民族相互の考え方の相違は厳然としている。たからこそ異文化をみる際も、より対照的な視点に立つべきてある。世界の中の日本、アジアの中の日本といった視点でみていくことが重要なのであり、民族対民族の問題に終わらせてしまってはならない。だからこそ、さらに日本人の国民性や文化的な視点からも掘り下げていく必要がある。その場合には、その根底にある日本的倫理観等も問題にせねばならないし、生命や人権に関しての具体的な問題をも追求していく必要があろう。

そうした問題をめくる生徒達の研究成果をここに問う次第である。お読み頂いた上での皆様の御意見、御感想を切に期待します。

〈大口グループ〉

―医療・医学と社会的弱者を見つめて―

「生命と環境」を考えるなかで一番大切なところにある医療の問題に取り組みました。生徒達は知識も十

分でなく、資料の難しさにたじろぎ、フィールドワークではしばしば専門用語に悩まされながら、多くの人の好意でやっとこの論文を仕上げました。

また、今後の社会問題となりつつある老人やホームレスなどにも意欲的に取り組んだ生徒達もいます。

これらの難しい問題を考えるなかで生徒達は成長していきました。この論文集はそのことを生徒達の言葉にして書きつづったものです。未熟なところもありますが、生徒たちの意欲を感じていただければ幸いです。

〈平松グループ〉

－Seeing is believing－

Internationalization－It's a key word in the educational world these days. But it is not enough just to read books or listen lectures on such matters Studying should be based on practice. That's why fieldwork is indispensable for our general human course. Through the fieldwark you could experience a lot of things at first hand Now you have completed your essaies on your own themes

In our group each of yor have studied mutual understanding in the world in various kinds of aspects I'm sure you have learned to see the stiuation of Japan from the worldwide point of view Thank you for all your ENDEAVERS!

〈米田グループ〉

－地球にやさしい研究－

21世紀までもう残された時間はあと僅かとなりました。いよいよ秒読みの段階です。

私たちは、今こそこの地球に対して思いやりと愛情を注いでいかねばならない千載一偶の好機がやってまいりました。

何故好機かと申しますと、それは、21世紀が愛の世紀（聖紀）だからなのです。

我々人間が自然を愛し、人を愛し、鳥や獣たちを愛して、この地球上に「愛」、「愛」、「愛」を満ち満たせていくならば、必ずや素晴らしいエデンの園が展開されることでしょう。

この広大な宇宙の中でわれわれの「地球船」は満身創痍、「瀕死の白鳥」の状態といっても過言ではありません。それどころか、それはもう衆目の一致するところと言っていいのではないでしょうか。

私達14名のグループはそんな地球をいとおしく、また、不憫に思って立ち上がりました。

〈飯島グループ〉

－スポーツと体の健康－

飯島グループには、種々雑多なテーマを持った生徒11人が集まりました。総合人間科の授業では、他のグループとは違って、結構いいかげんな時間を過ごしたような気がして反省しています。しかし、11人がそれぞれの個性を十二分に発揮して、それなりにまとまっていたのではないでしょうか。「七人の侍」（古いかな？）ではなく「十一人の侍」の心境で見守ってきました。

それぞれが、味のある論文をまとめてくれました。ぜひ一読下さい。

6．今後の課題

総合人間科の学習により、自分の興味・関心を探り、「何を学びたいのか」「生きていくとはどういうことなのか」という問いかけが一年の最初から常になされてきた。12月に行った高校２年選択科目の調査では、これまでより具体性を持った進路への取り組みがみられた。特にフィールドワークでは実際に社会の様々な方面で活躍している人々の姿に触れ、自分の人生を考えるよい機会ともなった。

総合人間科でめざしている「自分に人生を自覚的に選択する力」の育成は、体験に基づくこれまでの試みで十分可能性が確かめられた。ほとんどの生徒が自分達の力で実施したという充実感を得、楽しく学ぶことを体験し学習の意欲が増し動機付けとなった。これを一過性のものとせずに持続させ、より発展させていく次年度のカリキュラムの考察が急務である。

また学習の遅れがちな生徒の変容は、学習を幅広くとらえたため一概には言えないが、一定の成果をあげている。自然や社会との関係が稀薄な現代高校生にとっては教室を離れ、直接自分の目や耳で確かめたことの影響は大きい。目にみえるような変化としてすぐには現れてこないが、今後の行動変容への期待が持てる。

(1)　指導体制について

①個人研究

- グループ研究よりも人に頼れず自分の責任で行くという利点があるが、個人差が非常に大きくなる
- テーマが多岐に広がり、指導が行き届かない
- 独自制の強いテーマだと生徒間のディスカッションによる研究の深まりが望みにくい（一人よがりな研究になる可能性）
- 充実感も大きいが不安感も大きく、教師の配慮と励ましが必要

②指導教官制

・教師の力量

一人一人テーマも研究方法も異なる集団をまとめながら、各個人に助言を与えるためには、指導教官も多様な分野についての情報を集め研修を重ねていかなければならない。個人指導を充実させるためには現在の教官1人あたり生徒20人の体制では十分とは言えない。担当生徒の数をできるだけ少なくすることが望まれる。また、集団指導のためにはますます学年担任団での情報交換や話し合いに十分時間を費やすことが求められる。「時間が足りない」「教師の力量が問われる」といった声が大きい。

・構成

教官側；1学年3クラスのため学年団の構成では全教科をカバーできない。総合学習をめざし幅広い領域に対応するには教官構成に広がりがほしい。(本年度では、社会科不在)

生徒側；純枠にテーマ内容により7グループに編成し友人関係やクラスは考慮しなかった

→新しい友人関係が築かれる場面もあるが、友人不在のため積極性を欠く生徒も存在

・指導教官と生徒の関係

生徒間の信頼を得るためにはそれぞれ指導教官の個性に応じて自由に指導する部分と同一歩調で指導する部分を明確にするよう教員間の意志統一が必要である。指導教官による違いは生徒に戸惑いをもたらし教員間の不信にもつながる。

③学年ティームティーチング

既存の教科においては各教科担任の裁量で授業計画・年間計画が立てられた。総合人間科では7人の教員によるティームティーチングのため互いの意志の疎通を図り、共通の目標を持った授業計画が必要である。しかしこの教科に対する認識や指導方針がなかなか一致せず、生徒に対する姿勢にも問題が残った。初年度は担当者に一任の感があり、今後は教員相互における事前の指導方法の議論と指導助言に多くの時間をかけることが必要である。

・学年会の定例化の必要性

十分な討議と意志統一、情報交換と学習会

・指導計画の立案について

担当者に一任の傾向の改善

仕事の分担の方法

・教師の意識変革と姿勢

対生徒への発言と態度

一部の教員の否定的・懐疑的な言動

学年会での合意の不徹底、不適切な言動

授業への取り組み姿勢

指導者自らの消極性、指導力の不足

(2) 研究環境の整備

「脱教室」をめざし人や自然、社会から学ぶ教科であるだけに、地域・周囲の理解や協力を求めていく必要がある。また、教育機関の公開講座や地域の催しなどの情報が生徒達に行き渡るような方法を考えることも重要である。総合人間科にからめて学年通信などで紹介した区のボランティア講座、愛知ガンセンターの講座、研究所公開、心身障害児教育展などに出かけた生徒は例年になく多かった。学校行事である野外学習では学校からの依頼状と生徒の質問状で訪問先へ協力をお願いしたが、こうした教科を継続していくためには様々な人とのつながりを常日頃から作り上げておくことが大切であろう。特に教育学部の附属であることや、名古屋大学のキャンパス内に立地する利点を有効に生かして研究協力を積極的に働きかけていきフィールドワーク先を開拓する姿勢を維持したい。野外学習では教育学部（特に教育心理）の他、医学部・法学部・工学部・農学部・医療短期大学・保健体育センターなとの協力をいただき大きな成果をあけることができた。

また、保護者との連携を深め、この教科への理解を得て例えば講師としてまたは共同研究者として関わっていただく努力も活動の幅を広げるためには有効であろう。

(3) 評価の方法について

5で述べたように今年度は、自己評価と生徒間の相互評価と指導教官の評価を総合して3段階評価を実施した。プラス評価を中心に生徒に更なる意欲がわく方法を模索したが十分な論議がなされたとはいえない。また、とうしても最終結果である論文が評価の大きなウェイトを占めたことは否めない。研究結果の表現方法として文字だけでなく多様な方向性を探ることも考えていくべきであろう。評価項目の検討と評価方法について、今後研究を重ねる必要性が大きい。

〈資料１〉

1995年度　高校１年総合人間科　「いのちのネットワーク」

生徒の自己評価より

自分で評価できる点

＜取り組みの姿勢について＞

・興味を持ってできたこと（３名）
・自分なりに一生懸命取り組めた　（多数）
・テーマについて自分でよく考え理解を深めた事、投げやりにならず最後まで成し遂げた事
・自分の興味という視点からだけでなく、客観的にテーマを見つめることができた点。
・他人の眼の届かないところや気がつかないところ、思いつかないところを見ようとした
・様々な視点、観点からとらえようと努力した
・他人の評価を怖がらず、素直に現実をまっすぐ見つめた
・はじめは論文を書く事が楽しみだったが、11月以降その気持ちが全く無くなった。テーマを変えたいほどだった。フィールドワークの日から自分の過去との葛藤で毎日を過ごしていた。自分の過去に対して全く関係の無い人間から言われた事でショックを受け、それだけの事で悩んでしまう自分の弱さとかを痛切に知らされた。自分の行動を全て過去と結び付けられるのかと思うと論文を書きたくなかったが、やはり自分を自分という思いで何とか頑張った。

＜研究方法について＞

・関連したことの載っている新聞を取っておいたこと（多数）
・図書館に行って自分で積極的に資料を集めた。（多数）
・できるだけ多くの本やもらった資料を読んだこと。（多数）
・資料の収集に意欲的で、自分の意見・考えを煮つめた
・いろいろな本を読んで自分の意見を固めた。いろいろ自分で体験してみた。
・英語の文献を頑張って読んだ。
・テーマの選び方
・インターネットというものを使ったこと。
・アンケートの作成　（質問項目や聞き方などの工夫）　（多数）
・多方面へのアンケートの実施（多数）例；病院関係、名大の留学生、親、先生、野外学習先
・アンケートの集計、まとめ　（大変な量、英語の読解など）

＜フィールドワークについて＞

・フィールドワークの計画、当日の行動　（多数）
・フィールドワークで、一人の力で計画し実行したこと。
・フィールドワークに行ったときいろいろ質問をいっぱいした
・フィールドワークの事前、事後に自分でいろいろ調べたり勉強した
・フィールドワークを学校で決められた野外学習以外にたくさんやった　（多数）
　（夏休みのボランティア、遠く豊川の研究所、回数多く、ひとりで　…）
・ボランティア活動に興味関心を強く持って取り組み多くの事を学び、今後に生かしていける

＜研究発表について＞

・研究発表のとき全部。
・中間発表会の原稿を夜遅く迄書いたこと
・活動報告をするために何度も仲間と話し合ったり資料を作ったこと。

＜個人研究論文について＞

・研究論文の内容がうまくまとめられたこと。論文の構成の工夫　（多数）
　（論文にまとめるとき多くの図を使った点。全部手書きで表・絵などを工夫して入れた。１つ１つの項目について詳しくたくさん調べて書いた。フィールドワークで学んだことを論文にきちんと書いた。自分の意見、考えをうまく取り込めた。）
・自分の方法で調べたので面白く、分かりやすく、読みやすい論文にまとめられた
・自分の言葉で論文が書けた。自分の考えをかなりぶつけることができた。　（多数）
　（本や資料の丸写しではなく、自分の考えを書いた。　文献は参考程度に押さえた。テーマの内容が誤解されないように言葉や表現に気をつけた）
・ほとんど寝るまもなく必死で論文を書いたこと。絶対無理だと思った提出期限に間に合ったこと。徹夜で論文を書き上げたこと。　（多数）
・何ヵ月も前からメモ程度のものを集めておき、下書きを何度も書き直したこと
・論文に力を入れた。たくさん伝えたいことがあって何から書いたら良いかわからなかったが、大体伝えたいことが表現できた。
・論文をワープロで打った。

研究をすすめるに当たって困難だったこと

＜研究テーマについて＞
・テーマが二転三転し、フィールドワークの行き先がなかなか決まらなかった。
・脳死を理解すること。脳死についての本を読むこと。
・どうしても障害を持っている人たちのことを自分より下に見てしまっていた。それを横の関係にするのが結構難しかった。
・抽象的なテーマを少ない資料からどのように取り組んで行けばいいのか困った。
・外国の事をテーマにしたため殆ど本や資料でしか調べられなかった。
・心理的なテーマにしたので、答がはっきりしていないこと
・テーマを無理矢理変えさせられたのに、そのテーマで研究している人がいることを知った時。
・テーマがテーマなので、他人を傷つけていないかということ
・障害者から知的障害者に絞ったけど、それでもまだ範囲が広い気がして私なんかが知的障害者の全てを伝えられるかがとても不安だった。
・自殺のテーマはやはり書いている時つらいものがあった。だから文を考えるのに詰まったりもした。自殺についての過去の例を見ていると引き込まれそうになったりもした。

＜取り組み姿勢について＞
・総合人間科というものを理解しすすめていくこと。
・執行部や部活などで時間が余りなかった。留学生との交流などやりたいことができなかった。
・自分の考えがたびたび変化して定まらなかったこと。
・計画をしっかり立てないでいたので時間に追われて大変だった。甘く考えていていつも時間がなかった。間に合わないことばかりだった。　（多数）
・隔週の授業なので、やらなくてはいけないことを忘れてしまう。１回授業が終わるとその次までたくさん日にちがあると思ってしまっていた。
・この授業があるとその事にのめり込んで他の勉強や部活よりなんかずっとこの研究や討論会みたいにお互いにいろいろ意見を言い合っているのが面白かったけど、この授業が長くつぶれるとのめり込むものがないようなつまらん気分がした。計画的にやれなかったのが困った事かも知れない。
・自分の怠けた性格で延ばし延ばしになってしまった事。

＜指導教官制－教員の指導について＞
・厳しい先生のグループの人はたいへんとか、グループによってのやり方に差がありすぎるとか言っていたけど、何にもない私達はいい加減で暇があった分、最終的に困った事になった。差がないように同じようにやってもらいたかった。
・お弁当食べて後は自由という班にいたけど班によっていろいろ違っていたのはまずいかも知れない。論文も丸写しで出したし、提出日も全員のばしてもらったのは助かった。自分の班の先生よりも他の班の先生にいろいろ聞いてやれたから書けたけど、どうなっていたのか。もう少し丁寧にしてもらいたかった。
・本を探す事、文章にする事、情報を手に入れる方法などを個人的に指導を受けていた他のグループの人から聞いて参考にしたけど、自分のグループでは無かったので何にもわからなくて心配した。
・指導教官が何にも言わないので論文も書けなかったけど担任に見てもらって何とか出せた。

＜研究の方法について＞
・研究を始める手順や段階や進め方
・研究方法がありすぎて困った。
・なかなかテーマに関する資料が見つからなかった。参考にするものがなかった。　（多数）
（世論調査がどこへ行っても手に入らなかった。外国の福祉の資料が少なかった。
少しの本しか手には入らず総合的なものの見方がしづらかった。実物を見る事ができずリアルでないものがある。資料が少なく他の人からの意見があまり得られない。）
・資料を大量で読むのが大変だった。　英語の文献を読むのに苦労した。
・本などで調べていると内容が難しくて訳が分からなくなりかけたこと。
・アンケート（配布、回収、集計など）　（４名）
・話を聞きに行く場所が「ない」、資料を読む時間が「ない」、ワープロのインクリボンが「ない」　－「ない」ことがいちばんキツかった。
・聞いた話をまとめ、自分の調べたこととのつながりを見つけること。

＜フィールドワークについて＞

・フィールドワークの場所の決定。　（多数）

（行き先の候補が殆どない。自分にできそうなボランティアが見つからない。自分と関係ない所に行かされてあせった。一人で自分の行きたいところに行きたかった。）

・訪問先への電話やアポ取り。　（多数）

（訪問先の都合と野外学習の日程の不一致。せっかく準備したのに直前になって訪問できない所があった。）

・フィールドワーク先での質問事項。

・いろいろな人との接触。（多数）　例；障害者の人とどう接すれば良いのか疑問と心配。

・都市部を離れて田舎でフィールドワークを行ったので交通費がかかった事。

＜個人研究論文について＞

・論文のまとめ方　（多数）

（人から聞いたことだけに固執し最初から書き直さねばならなかった。資料のまとめ方。フィールドワーク、アンケート、文献、あまりに多くの内容をどうやってまとめるか。研究テーマについて何も知らない人に、自分の研究内容をどのようにして伝えるか。説明から自分の意見・考えを述べる時どのような言葉が適切か迷った。自分独自の文章を作り出すこと、その文章が読む人にうまく伝わるようにすること。）

（テーマを心とした事で一人一人違う心をどう文章としてよいかわからず、納得して書き進められなかった。そのため出来上がった論文はちょっと物足りない感じがした。提出のために書いている気がして自分の研究してきた事をもっとしっかりまとめたかった。）

・論文を書く事（書く事が苦手）。　書く事がない。　いかにページ数を埋めるか。

・論文の締切を守ること。（多数）　前日朝５時までかかっても完成しなかった。

今後に生かしたいこと

＜研究テーマに関して＞

・１年間の研究テーマをさらに追究したい。　（多数）

（もっとエンジンについて詳しく知りたい。明日早速行ってみたい所があるし読みたい本もできたし、視野を広めていきたい。研究に必要なことを調べていたら少し違うことにも興味が出てきたのでそちらを調べたい。他の薬害についても調べてみたい。トイレのことを並の人より知っている人間になれたのでトイレに愛着がわき、いつもトイレに行くとこれはどこのトイレかなと思って調べている。もっと知りたい事は多くあるので何に生かすかというのは関係なく、いつかまた研究出来たらいいと思う。）

・もっとよいテーマの選択

・研究テーマに関して学んだことを生活に　（多数）

これからの運動の時に生かしたい。　賢い消費者になる。

研究して少しはエイズのことが分かったので自分自身エイズにならないように気をつけ、自分の身近に感染者や患者がいたら差別しないように心がけたい。

薬を見たら注意書きをよく読む。薬の飲み方に注意をはらう。

自分の自動車は自分で毎日管理したいと思う。

障害者の人の手伝い。　障害者に偏見を持たず積極的に接し理解していきたい。

テレビなどの見方を少し変えてみる。　集中力を人一倍出しての勉強。

家族の中で自分の立場を確立する。

＜研究の方法について＞

・人との接し方や文の書き方などなかなか出来ないよい経験になったので、より発展させたい。

・何事も主題だけでなく、周りの環境・状態にも気を配るとある事が見えてくるという事

・何事も前々から準備しておくべきことを知った。

・自分でよく考え、最後まで投げやりにならず成し遂げる事。

・フィールドワークに行きいろいろな人に出会って聞いた話に考えさせられた。

・研究計画の大切さ。　今後締切は守ろうと思う。

・文章をうまく書くこと。

＜考え方や生き方について＞
・人の違った意見を取り入れて考え実行しようと思う。
・これからの私の生き方について、自分をごまかさずに生きていく。裏表のない人になりたい。
・生と死についての考え方。　人の生や他の生命の生について他面的かつ客観的にものを見、凝り固まった一つの概念だけにかじりつかない。　生きることに対して冷静でありたい。
・現在の日本の状況を理解しておく。
・差別なんてない普通の生活をしていきたい。自分の知らないところでも差別があるという事を心にとめて自分に関係ないと思わないで過ごしたい。
・アジア差別の問題も聞いたので福祉の活動もしてみたい。
・自分自身のものの見方だけでなく、客観的なものの見方も必要だということがよくわかったから自分の考えに固執しないで柔軟な心ですべてのことに対応していきたい。
・人とかかわる。生命を大切にする。
・人の気持ちがわかって他人の意見も重視した行動が出来たらいいと思う。他の人の論文についても理解して考えていきたい。
・論理的、多面的に物事を注意深く見つめるすべを得たい。
・社会を見つめる視野が広がった。社会の中での弱者の存在の重要性を考えたい。　（多数）
（ボランティアを通して障害者とふれあったことによって、人間の偉大さを学んだ。これから街で障害者を見かけたら偏見の目でみないようにして、友達にも伝えていきたいと思う。町で障害者の人と出会った時話しかけてお手伝いできるようになったので困っている人に積極的に話しかけたい。偏見を持たなくなった。）
・今の自分の生活が多くの犠牲の上で成り立っている事を忘れずにいたい。
・これからたとえ死にたいと思うことがあったとしても、この研究を生かして命について考え直したいと思う。
・研究を進めながら考えたことや変わっていった気持ちを心の中においておこう。

＜自分の進路や将来＞
・進路選択の動機になった。　（４人）
（福祉について少しだけ興味を持ったというか、福祉に関わっている自分が少しいいなあと思うので将来福祉方面に進むことも考えてみようかな。）
・趣味の世界で役に立つだろう。

＜その他＞
・全部。
・特になし。　（２名）
・あるわけがない。もう２度とやめてほしい。
・自分の知識を深めることは出来たが、生活には生かせないし、こんな程度のことで生かせるほど、人間の意識が変われるとは思わない。
・いろいろな先生の教え方があるのを知った。僕たちはいい加減だから気楽に出来たが、先生によって違うのは困る。ちゃんと説明してほしい。だから何もない。
・まだ何に生かせるのかわからない。でもいくつかのことに気づいた。何に生かすかは関係なくもっと知りたいことを研究していきたい。

〈資料２〉

総合人間科保護者アンケート結果

先日お願いいたしました保護者アンケートにご協力ありがとうございました。
６４名の方から回答をいただきましたのでここにその結果をお知らせします。

（１）ご家庭で総合人間科のことが話題になりましたか？

１．よく話題になった	２．時々なった	３．ならなかった
１５名（23.4%）	４１名（64.0%）	７名（10.9%）

（２）学年通信で総合人間科の動向もお知らせしましたが、ご覧になられましたか？

１．毎週読んだ	２．時々読んだ	３．読んだことがない
２３名（35.9%）	３５名（54.7%）	６名（ 9.4%）

（３）昨年の総合人間科でのお子さんの個人研究テーマをご存知ですか？

１．最初から	２．研究の途中	３．最後に	４．知らない
４５名(70.3%)	１６名(25.0%)	０名(0%)	３名(4.7%)

（４）個人研究に際してご家庭で何か相談を受けられましたか？

１．受けたことがある	２．受けたことはない
４０名（62.5%）	２４名（37.5%）

（５）（４）で受けたことがあるという方へどのような相談を受けられましたか？

１．テーマの決定	１０名
２．情報の収集（本や新聞記事など）	２６名
３．フィールドワークの行き先	１０名
４．訪問先でのマナー	８名
５．研究の進め方	１０名
６．論文の書き方	**１３名**
７．ワープロなどの技術	１１名
８．その他	３名

（６）研究論文集「いのちのネットワーク」はご覧になりましたか？

１．見た	２．見ていない
４９名（76.6%）	１５名（23.4%）

（７）総合人間科の学習によってお子さんにプラスになったと思われることは？

１．社会的な視野の広がりや総合的なものの見方	３５名	③
２．知識や経験不足の実感	１５名	
３．これまでの学校生活の中ではない人や場との出合い	３７名	①
４．進路や適性について考える機会	５名	
５．興味関心の発見、問題意識のめばえ	２６名	④
６．自ら学ぶ楽しさの体験、学習意欲	９名	
７．情報を収集したり論理的に考える研究の方法	３７名	①
８．発表したり、まとめる力	２２名	⑤
９．先生や生徒間での話し合いや交流	１２名	
10．ない	１名	
11．わからない	２名	

（８）総合人間科の学習でマイナスと思われる点、不安な点は？

１．時間がかかる	２１名	①
２．個人差の大きさ	１６名	③
３．学校外での活動における誘惑や事故など	４名	
４．受験への対応	６名	
５．この学習の意義がよく理解できない	４名	
６．先生の指導力	４名	
７．ない	１７名	②
８．わからない	３名	

（９）これまでの試みはお子さんの将来に役立つと思われますか？

役に立つ	いくらか役に立つ	役に立たない	どちらとも言えない	わからない
３０名(46.9%)	２５名(39.1%)	２名(3.1%)	４名(6.3%)	２名(3.1%)

(10) 総合人間科の試みに全体として賛成ですか、反対ですか？

賛成	どちらかといえば賛成	どちらともいえない	どちらかといえば反対	反対
３０名(46.9%)	２０名(31.3%)	１２名(18.8%)	２名(3.1%)	０名